
ウサギノセツジョク（それからの「ウサギとカメ」）

海風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウサギノセツジョク（それからの「ウサギとカメ」）

【Zコード】

N1367M

【作者名】

海風

【あらすじ】

カメとの力ヶっこに負けたウサギは、屈辱的な生活を送っていた。ウサギは、カメの殺害計画を企てる。あらゆる計画を検討した結果、ウサギは服毒自殺に見せかけてカメを殺害しようと試みる。村の動物が噂していた山の麓に咲いていた紫の花トリカブトを毒薬に使用する。トリカブトを入れた野菜ジュースを持つてカメの家を訪れたウサギは、言葉巧みにカメに遺書を書かせる。遺書作成に成功し安心したウサギは、カメ特製の辛口カレーを味見し、喉が焼けるほどの痛みを感じる。水を求めるウサギにカメはウサギの持参した野菜ジュースを

飲ませる。喉の痛みがおさまったウサギは、自分が飲んだのが、持参した野菜ジュースだと気付き気絶する。目覚めたウサギは、献身的に看病してくれたカメに対して、自分の罪を告白する。カメから山の麓に咲いている紫の花が（トリカブト）でないことを教えられたウサギは安堵する。そんなウサギにカメは、山の麓までのカケツコを申し込む。ウサギとカメは、山の麓を目指して走る。ウサギは真剣にゴールを目指し、あっけなくゴールする。観衆から称賛の声が聞こえる。しかし、ウサギの長い耳には聞けない。ウサギはじつと自分の走ってきた道を見つめている。数時間後、カメの姿が見えてくる。どこからかカメへの声援が聞こえてくる。応援の声に励まれ、カメは「ホールインする。山の麓に拍手の音がこだまする。ウサギとカメは互いを讃え合つよう抱き合つた。

ウサギは最大の屈辱を受けた。

村一番鈍足のカメに、山の麓までのカケツコで敗れたのである。自信過剰により生まれた 居眠り という油断が、ウサギの敗因となつたのだ。

「くそー、普通に走つていれば負けるわけがない！」

ウサギの悔しさは計り知れないものだつた。あのカケツコ以降、ウサギとカメの立場は完全に逆転した。村一番俊足だったウサギは、村の人気者であり、宅配屋も盛況だつた。しかし、カケツコでの居眠りにより 急け者のレツテルを貼られ、ウサギに宅配を依頼する者はいなくなつた。そればかりか、ウサギと話をする者さえいなくなつたのだ。逆に、鈍足でコツコツ着実に歩み続けたカメは、その真面目さが認められ、一躍、村の人気者となり、名誉村民にも選ばれた。

「なんで、あのノロマで鈍感なカメが名誉村民に選ばれるんだ。許せない！ 絶対に許せない！」

ウサギの中にカメへの憎しみが沸々と込み上げてきた。

「カメさえいなければ、俺はもう一度、村の人気者に戻れる」

逆恨みとも言うべきカメへの憎しみが昂じて、ウサギにカメへの殺意が芽生え始めた。

「そうだ、カメをこの世から抹殺してしまおう！」

ウサギはベッドに寝転びながら、カメ殺害計画を頭の中で巡らした。

「まずはカメを殺方法だ。普通に殺してしまえば、一番に俺が疑われる。どうしたものか……。そうだ！ 自殺だ！ 自殺に見せかけて殺せばいいんだ」

ウサギはベッドから立ち上がり、椅子に座るとテーブルに紙と鉛筆を用意した。

「自殺と言つてもいろいろあるなあ……。崖からの飛び降り自殺に見せかけるといつのはどうだらう? カメを崖まで呼び出して、隙をみて後ろから突き落とす。ノロマのカメなら難なく出来るはず。よし、飛び降り自殺で……、いや、拙いぞ、ダメだ。カメは泳ぎが達者だ、海に落ちても溺れない。それに、岸壁や岩場に体をぶつけたとしても、あの硬い甲羅に守られて怪我ひとつしないだらう?」

ウサギは紙に書いた 飛び降り自殺 といつ文字にバツ印を入れた。

「んんんー、そうだ、カメソリで手首を切るといつのはどうだ。夜、カメの家に忍び込み、眠っているカメを風呂場に運んで手首を切る。よし、これだ! 鈍感なカメならぐつすりと眠つていて気付かないだろ?」

ウサギは紙に 手首を切る と書いた。しかし慌ててバツ印を入れた。

「ダメだ、ダメだ。カメは腕が短い。左手の手首を右手で切るなんで出来るはずがない。困ったなあ……」

険しい表情を浮かべて、ウサギは天井を見上げた。

「崖からの飛び降りもダメ、手首を切るものダメとなると、あとは……。そうだ、毒殺だ、毒薬を使って自殺に見せかけよう!」

ウサギは紙に 服毒自殺 と書き込んだ。

「問題は、毒薬をどうやって手に入れるかだ。病院から盗むか、いや、待て待て、確かに誰だつたか山の麓にある花を見て『この花、ひょっとしてトリカブトじゃないか?』って話していたなあ……」

ウサギは辞典を取り出して トリカブト を調べた。

「えーっと、『トリカブトは、キンポウゲ科トリカブト属の総称。有名な有毒植物。主な毒成分はジテルペニン系アルカロイドのアコニチン。食べると嘔吐、呼吸困難、臓器不全などから死に至る。解毒剤はない。花の色は紫色が多く、白や黄色、ピンク色がある。名前の由来は、花が二ワトリのトサカに似ていることからと言われている』があ……。確かに山の麓に咲いている花は紫色で、花の形がト

サカみたいだつた。やつぱり、トリカブトに間違いない」

ウサギは紙に書かれた 服毒自殺 にマル印を入れた。

「自殺と言えば遺書が必要だ。どうやってカメに遺書を書かせるか
だが……。

まあ、性格の良いカメのことだ、なんだかんだ上手く言えば、遺
書めいた文ぐらいは書くだろう」「

ウサギはニコリと不敵な笑みを浮かべた。

「よし！ 明日からカメの身辺調査をして、細かい計画を立てると
するか」

そう心の中で囁くと、ウサギは再びベッドに戻り、大の字に寝転
がつた。

ウサギの雪辱の始まりであつた 。

次の日から、ウサギは朝早く起き、カメの一日を監視し始めた。
数日後、仕事帰りに野菜ジュースを買っているカメにウサギは声
を掛けた。

「カメ君、久しぶり！ 元気だつた？」

突然の呼び掛けに、カメは大きな目をさらに大きく開けて、ウサ
ギを見つめた。

「ウサギさん、お久しぶりです。僕は相変わらずマイペースで暮ら
しています。ウサギさんこそ、お元気でしたか？」

「ああ、ありがとう。元気だつたと言いたいところだが、君との力
ケツコに負けてから、村での肩身が狭くなつてね」

「ええつ、どうしてですか？ ウサギさんは村の人気者じゃないで
すか」

なんの厭味もなく、カメがウサギに問い合わせた。

「人気者は君の方さ。今じゃ、僕は村一番の怠け者つて呼ばれてい
るよ」

「そんな！ 僕が力ケツコをしようと言つたばかりに……」

「いや、君のせいじやないよ。僕の自業自得さ」

「ウサギさんは何も悪くないですよ。なんか、僕……、申し訳なくて……」

「もし、君が僕のことを気にしているのなら、どうだらう、一度食事に招待してくれないかい?」

「食事に? 良いですよ、ぜひ家に遊びに来て下さい」

カメは先程とは打つて変わつて、嬉しそうに満面の笑みで答えた。

「今度の土曜日の昼は、どうかなあ?」

「というと明日ですね。明日なら仕事も休みですから大丈夫です。僕の十八番、特製辛口カレーでおもてなします」

「それじゃ、僕も君の大好物の野菜ジュースを持って行くよ」

そう言つとウサギはカメから野菜ジュースの瓶を取り上げた。

「これは明日、僕が差し入れするから、カメ君は買わなくていいよ」「本当にいいんですか? お言葉に甘えさせて頂きます。ありがとうございます。それでは、明日の昼にお待ちしています」

ウサギとカメは、互いに異なる笑みを浮かべた。その帰り道に、ウサギは山の麓に向かい紫の花を摘んだ。家に戻ったウサギは、椅子に座り鉛筆を手に取つた。

「よし、出来た。あとはトリカブトの準備をするだけだ」

ウサギはカメの殺害計画を書き上げると、テーブルに置かれた野菜ジュースの瓶と摘んできた紫の花を見つめていた。

「いらっしゃい、お待ちしていました」

「いや、こちらこそ、お招き頂いて」

ウサギは野菜ジュースの瓶をカメに差し出した。カメは一礼し、ウサギを家に招き入れると野菜ジュースの瓶を食卓に置いた。

「今、カレーの仕込みの最終段階ですから、もうしばらく待つてください」

部屋中に食欲をそそるカレーの香りが充満している。

「いい匂いがするね、楽しみだなあ。カメ君、忙しい時に悪いけど、この紙に一筆書いてほしいことがあるんだ」

「ええ？ 今ですか？」

「昨日話していたように、僕は今、村で肩身の狭い思いをしている。だから、みんなの誤解を解くために、一筆書いてほしいんだ。一生のお願いだ、頼むよ、カメ君！」

ウサギの哀願にカメは頷くと、ウサギの言つままに文字を書き始めた。

「ウサギさん、これでいいですか？」

カメから手渡された紙に、ウサギは目を通した。

村の皆さんへ

ウサギさんとの力ヶツコで僕は勝ちました。しかし、それ以降、ウサギさんが村の皆さんから 急げ者 と仲間外れにされていると聞きました。

僕が力ヶツコで勝ったばかりにウサギさんが悲しい思いをしています。

どうか皆さん、僕の一生のお願いです。ウサギさんに優しくしてあげて下さい。

お願いします。
さよなら

カメより

「ありがとう。これで明日から、僕も昔のように過ぐせると」

ウサギは満足そうに、その紙を見つめた。

「でも、さようなら っておかしくないですか？」

「えっ！ そうかなあ……、手紙の最後は さようなら でいいだ

うう

「そうですか……」

「それより、いい匂いがしてきたなあ

ウサギは上手に話をすり替えた。

「ウサギさん、うちの特製辛口カレーはすごく辛いんです。最後の香辛料を入れる前に、味見をしてもらえないですか？」

「了解！ それじゃ、味見させてもらおうか」

遺書作成という難関をクリアした安心感からか、ウサギは椅子から立ち上がり、カレーの鍋に近付いて行つた。

「香ばしいカレーのいい匂いだ」

「熱くて辛いですから、気を付けてくださいね」

カメは、カレーを注いだ小皿をウサギに手渡した。

「大丈夫だよ。それじゃ、頂きまーす」

カレーに息を吹きかけると、ウサギは一気に小皿のカレーを飲み干した。

「ううひ……、んんん……、が、が、が、がらい！」

顔を真っ赤に染め、赤い目を更に赤く充血させて、ウサギはカレーの辛さに喉を押さえながら、その場に座り込んだ。

「ウサギさん！ 大丈夫ですか？」

「の、の、のどが……、や、や、やげる……。み、み、みず！」

「ああ、水ですね、水……。え、えっと、ああ、どうしよう、そうだ！」

カメは食卓に置かれた野菜ジュースをコップに注ぎ、そのコップをウサギの口にあて、ウサギの喉に流し込んだ。「ゴクリ」「ゴクリ」とウサギは野菜ジュースを一気に飲み干した。

「あー、助かつた。熱さと辛さで喉が焼けるかと思った」

ウサギが喉を擦りながら、小さな声で囁いた。

「ごめんなさい、うちのカレーは本当に辛いですから。でも、よかつた。ウサギさんが野菜ジュースを買って来てくれて……」

「ええっ！ 野菜ジュース？ 野菜ジュースって、まさか……」

ウサギは真っ赤な目で食卓の野菜ジュースの瓶を見つめた。野菜ジュースが三分の一ほど減っている。

「まさか、僕が飲んだのは、この野菜ジュース？」

「そうですよ、この野菜ジュースです」

「ウ、ウ、ウギヤー」

カメの言葉を聞くや否や、ウサギは絶叫し、その場で泡を吹いて倒れた。

「ここはどこだ？ 天国か？ いや、カメを殺そうとして自分が毒入りジュースを飲んだのだから、きっと、ここは地獄に違いない心の中で呟きながら、ウサギはゆっくりと目を見開いた。

「ヤギ先生、ウサギさんが田を見ました」

空耳だろうか、ウサギの長い耳にカメの声が聞こえてきた。

「おう、よしよし、目が覚めたな。よし、これで大丈夫じゃ」

白衣に身を包んだヤギ先生がウサギの額に手を当てた。

「ヤギ先生？ ヤギ先生がどうしてここに？ どうでここはどこですか？」

「何を言つておるんじや。まだ寝惚けておるのか？ ここはカメ君の家じや。お前は、カメ君の作った辛いカレーを食べて氣絶したんじやよ。まあ、カメ君が機転を利かせて野菜ジュースを飲ませたから良かつた。それにカメ君は数時間、ずっとお前のそばで付き添つていたんじやよ。カメ君に感謝しないと。それじゃ、わしは帰るとするか」

「ありがとうございました」

ヤギ先生と入れ替わりにウサギの視野にカメが現れた。

「ごめんなさい、ウサギさん。僕が辛いカレーを味見させたばっかりに、こんなことになってしまつて……、本当にごめんなさい」「心からすまなそうに謝るカメの姿を見て、ウサギは自分が犯そうとしていた罪の深さと愚かさを思い知った。

「ごめん、カメ君。僕の方こそ、実は……、僕は……、僕は君を殺そうとしていたんだ」

「僕を殺そと？ ウサギさんが？」

口をポカーンと開けて、カメは聞き返した。

「そつなんだ。カケツ口に負けて、村のみんなに仲間外れにされた

ことを君のせいにして……。君への逆恨みから君を殺そつと、野菜ジュー^sスにトリカブトの毒を入れたんだ」

「トリカブトの毒?」

「そうさ、山の麓に咲いているトリカブトだ」
カメは口だけでなく、目を大きく見開いた。

「ウサギさん、違いますよ。山の麓に咲いている紫の花は、トリカブトじゃありません。アブラナ科のアラセイトウという花です」

「ええつ! トリカブトじゃないの? それじゃ、毒は?」

「毒草じゃありません。全くの無害です」

「そうか……」

だから、野菜ジュー^sスを飲んでも、俺はこうして生きているのか。
とんだ勘違いだ

ウサギは自分の犯そ^うとした過ちを後悔するとともに、自分の無知による誤りに感謝した。

「本当に僕はバカだつた。カメ君、許してくれ!」

ウサギはベッドから降りると床に長い耳をつけて詫びた。

「ウサギさん、止めてください。ウサギさんがそんなに悩んでいたなんて僕は知らなかつた。あのカケツコの勝敗がウサギさんをそこまで追い込んでいたなんて……。僕の方こそ許して下さい」

カメも長く伸びた首^ごと床にこすりつけた。ウサギとカメはお互いの思いをぶつけ合つた。そして、自然にウサギとカメは、お互^いを労り合つたのだ。

「ウサギさん! もう一度、山の麓までカケツコしましょ^うー。」「カケツコ?」

「そうです。あのときと同じように、一緒に走りましょ^うー。」
にこやかなカメを見て、ウサギにも微笑みが戻つた。

「よし、走ろ^うー!」

「ウサギさん、遠慮は無用です。真剣勝負でお願いします」
力強くカメが言い切ると、ウサギもそれに答えた。

「もちろん! 今度こそ油断しないぞ!」

ウサギとカメは睨み合い、火花を散らし始めた。

「よーい、ドン！」

前回同様に、キツネの合図でウサギとカメは、山の麓を目指してスタートした。俊足のウサギは、見る見るうちにカメを引き離して行った。鈍足のカメは、マイペースで一步一步、歩んで行った。カメの視界から消えたウサギは、カメとの大差におごることなく、地面を踏みしめながら走り続け、山の麓に辿り着いた。村の動物たちが大きな拍手でウサギを出迎えた。

「やっぱり、ウサギは早いよなあ」

「村一番だ！」

そんな声があちらこちらから聞こえてきた。しかし、そんな声もウサギの長く白い耳には聞こえない。ウサギは自分が走つて来た道を、じつと見つめていた。

何時間経過しただろう。道の向こうにカメの甲羅が見えてきた。カメはスタートしたときと変わらないゆっくりとしたペースで、一步步進んでいた。ゴールを目指すカメの真剣な眼差しに、動物たちは息をのんだ。

「もう少しだ！ がんばれ！」

誰かの声が山の麓に響くと、誰彼なしにカメへの声援が湧き起つた。カメがゆっくりとゴールラインを越える。自然に声援が拍手喝采に変つていく。全力を出し切り、ぐつたりしたカメにウサギが歩み寄る。ウサギとカメは、互いの健闘を讃えるように力強く握手を交わし抱き合つた。

「ありがとう！ カメ君！」

「ありがとう！ ウサギさん！」

鳴り止まぬ拍手の中、ウサギとカメの流す汗は、さぞかし香辛料の効いた辛口の汗であつただろう。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367m/>

ウサギノセツジョク（それからの「ウサギとカメ」）

2010年10月9日23時32分発行